

大隈言道研究

年譜編第三部

進藤 康子

要旨

江戸時代後期の博多の歌人、大隈言道（おおくまことみち）の年譜稿第三部。言道六十一歳（1858）から没年（1876）までの文事的営為の跡を記す。この頃、大阪に在住の言道は、文人墨客の杖を曳く名所である、奈良の月ヶ瀬（月の瀬）や吉野を旅し先人の風雅の事跡を辿る。月ヶ瀬の地に触発された言道は、故郷福岡の弟子達に書簡やスケッチを送り、望東の上阪のきつかけともなる（『上京日記』『向陵集』）。言道は「大隈言道家集」の選歌に没頭、文久三年三月、言道六十六歳にして念願の家集『草径集』出版の運びとなる。近藤芳樹、佐佐木弘綱等と交流し、弘綱書簡に『草径集』贈呈へのお礼の文言も見いだされる。言道は次なる『続草径集』への出版に意欲を示すが叶わず、晩年、中風に侵され故郷に戻る。凡例は大隈言道年譜稿第一部（前々号）参照。

キーワード 草径集 月瀬紀行 大隈言道 野村望東尼 向陵集
佐佐木弘綱 千船集 近藤芳樹 鳴川集

安政 五年 戊午 (1858) 六十一歳

○正月、月の瀬の梅見に行く。

月のせ、うめ見、うまのとしむ月廿六日、なかせなにがしといでたつ。京ばしの鶯、なか洲のとり、丹波山の春霞、川きよくひろし。八幡の神社。ココニトマル。タタミヤ三右衛門。方生川はしきわ。木津の中食。か茂の止宿。
二十七日、廿八日、月の瀬。

言道自筆歌集『今橋集』

●言道の「月の瀬」（月ヶ瀬）の旅に関して、言道より書簡と、月ヶ瀬の梅林の様子を描いた絵を受け取った門下生の野村望東は、この地をあこがれ、命がけでも見に行きたいものだと、次のように『向陵集』に記している。

言道が、月のせの○梅見に行しよし、いひおこしける文の中に、かしこの山ざとのさまかきたるゑをいれておこせられしを見ていのちをも月のせ川にうちいれて見まくほしきはちよろづのうめ

○九月、『戊午集』十二巻成る。嘉永五年より安政四年までの言道渾身の歌五万首のなかから選出（『大隈言道家集』）所在不明。

◇野村貞貫没。妻もと、剃髪して望東尼となる。

安政 六年 己未 (1859) 六十二歳

○五月、『大隈言道家集』（上下三三〇〇首）『戊午集』より選出。

○九月、『今橋集』上下（三九〇〇首）『戊午集』より選出。

万延 元年 庚申 (1860) 六十三歳

○住居を、今橋一丁目境筋に移す。

●次の書翰は、萬延元年に言道が居を、今橋一丁目堺筋に移し、新たな居所の近隣の様子を伝えつつ、草径集出版に際し、その後の協力を、頼みの綱である飯塚門下生の小林重治にそれとなく書いている。

同内容の手紙を娘婿の田代正良にも送付している。

御書十日啓上候益々御多福可被成御座候。杳祝佳。わたくしこ
と唯々多事のみにて、風邪等も引候間無御座御免仕候。御休言

可被下候。年頃は尊書相来早速御報可申上候処大に延引御安寧可申下候。且又御祝被下御菓子折重て百足被入御座候難有奉落手候。扱わたくしことあちせ漸拝点出来いたし候間、渡船にさし下し申候。御一覽下候。わたくし事も、今橋に出張。二月五日帰居仕候。向へは平五。日本の脇閑。うしるは三井八郎衛門、となり続き嶋地善五郎。その向へは嶋地善左衛門。すこし下りて、かしまや久左衛門作り来候。此節、御用銀、百萬両口のうちにわたくしも銀一枚ばかり家代よりいだす。

○家集出きに候(中略) わづかづゝにて今月中迄調可申候(中略) 頓首

四月十二日

大隈言道

小林重治大契 御もとへ

『大隈言道書翰』二 九州大学附属図書館蔵

文久 元年 辛酉 (1861) 六十四歳

○野村望東尼、上坂して今橋に言道を訪ねる。望東尼『上京日記』からその言道の大坂での状況を垣間見ることが出来る。

・ 十一月廿四日福岡を発つ。

をさなかりしころより、一たびはもゝ敷の大宮を拝し奉り、序に都の花紅葉名所古跡をも見ばや、と常に忘るゝ時もなかりけり。さるを我が師言道ぬし、この五年ばかり大阪にもものせしをかしこの歌人とゝめてかへささりければ、いかでのぼりてなどおもふうち、貞能君もなくならせ給ひしかば、わすれがたみこのことのはは、いかで梓にも彫らせてん、とのたまひし事もあれば(中略)

十一月廿日によゝかどでせむとて常興言正などといひあはせたるに上より御しるし文の下らざりければ二十四日にさだむ

(二)

・ 廿六日黒崎の桜屋に宿る。

・ 廿七日朝とらの時ばかりよりこゝをいでて川つたひにゆく。

・ 廿八日多さとのわたしにゆくついでに西田先生をどぶらひて

・ 十二月朔日、やう／＼船出。

・ 七日舟はてゝあくる八日いそぎ大隈言道大人のもとにゆく。

・ うれしさいふばかりもなし。

たゝかたみになみたさへこぼる。つもることゝもいひつらんもあへず、ゆめこゝちなるに、けふはこゝの弟子をはしや何かしといふとみ人の家にて、詩歌琴笛などのまとあす、とていそぎゆくはずなれば、おのれも常興もこよ、といはるゝに、舟よりあがりたるまゝにてあかじみたるきぬもやつれたるを、いかで、などいへども、いとほじ、とて、ゐてゆかれしに、なにかきなには人のきよらをつくしたるすまひ、あそびのことごとたゝ人とおぼえぬりさまなり(中略)

この日の楽人天王寺の人々にて、ものゝ音どもいみじうめでたし。翁のよまれしうたをうたひて ものゝねにあはせなどするこゑ、いとゆたかなり。かくてさかづきのめぐるにしたがひ、かど／＼しきかたゆるびきて、おもひ／＼にさるがくなどまひうたふをかし。そのいてはかてふことをして、たがふれたることこそまぢ人のけはひもあれ。

よふけぬれば、おのれをあるじがしひてとゝむ。常興もともにやどりて、あくる九日はよべにおなじまとあしたる賀東何がしがいへに、しひてこかしといひしかば、すなはちゆく。あるじ人よりはこゝろきゝたる人にて、よろずをかしげにものす。よるはうたひの師のもとにゆきて、小袖曾我弱法師などをうたふ。あはれなり。よふけて津島屋にかへる。

・ 十三日賀東ぬしがまりの師のもとにてまとあすとて題を出しけるを、くれはてゝ常興言正かへりきたれり。

・ 十五日には三人ながら賀東のまとゐにゆく。

兼題 水

たをりきてかめにさしたる梅が枝をこほりとぢたる花かめの水

・ 十八日何がしといふ人のいへにうたのまとゐしたるにゆきてと
しわすれといふ題をよめる
むかしよりわがきゝなれしことわざのとしわするとはまことこ
よひぞ

・ 廿日はそらはれてきよし。御やかたにゆきしに京師立売比喜多五
三郎といふ人、ゆかりあるがこゝにてはからずあひしに、しひて京
にこかしとくれ／＼いはるれど、先づとしあけてなどいひてかへり
たるに、やがて、津島屋にきたり。しひてそゝのかしければおりふ
し翁^(五)もきあひて、さはよきつてなればゆくやよろしからむなど
いはるゝまゝにいかにも思ひたち、あすは朝舟にてなどいことせは
／＼しくなりぬ

・ 廿一日 あかつきよりおきいでゝ船に行く いとさむし
言道翁のもとをさりて遠くゆく ほゐなくして(後略)

右の望東尼『上京日記』の記述「八日いそぎ大隈言道大人のもと
にゆく うれしさいふばかりもなし。たゝかたみになみださへこぼ
る。つもることゝもいひつらん」と、言道との再会をどれほど待ち
望んでいたかがわかる。

また、言道の大阪での日常がたいへん具体的にわかる。時に、歌
の師として、ある時は、太鼓持ちとして、しばしば「まとゐ」に呼
ばれて歌を詠んでいる事がわかる。常興や望東までもが「けふは、
こゝの弟子をはしや何がしといふとみ人の家にて詩歌琴笛などのま
とゐすとていそぎゆくはずなれば、おのれも常興もこよ」と御伴さ
せてもらい、大変光栄に思っている。この様にして、望東尼一行は、
津島屋を起点として言道や言道の参加するまとゐに積極的に参加さ
せてもらった。ひとえに言道の築いた人脈の恩恵だった。「きよら
をつくしたるすまひあそびのことごと、たゝ人ともおぼえぬりさま
なり」「この日の楽人天王寺の人々にて ものゝ音ともいみじうめで
たし。翁のよまれしうたをうたひて、ものゝねにあはせなどするこ
多、いとゆたかなり」といった表現からしても 望東尼らにとつて、
見るものきくもの大変珍しく感動と驚きの日々であった。そして、
なによりも師言道の「まとゐ」の質の変化に少なからず驚きを隠せ
なかつたのではあるまいか。

文久 二年 壬戌 (1862) 六十五歳

○ 天満若松町光専寺の借家に移る。

○ 『壬戌歌撰』門下生小林重治^(六) 歌集、一九二首。言道清書。

飯塚の弟子小林重治の『壬戌歌撰』^(七)の奥書に「難波天満大隈言
道」とある。『壬戌歌撰』は、文久二年に、大坂天満在住の言道が、
重治の歌の中から優れた歌を選んで、言道自身が清書して重治にお
くつたものである。この奥書より言道の当時の住所や、京坂で次々
に上梓された『千船集』^(八)、『鴨川集』などの類題歌集の事情を知
ることが出来る。

○ うた二百首あまりにてかつすくなく見ゆ

るものからいとすぐれたるをのみえらみ侍れば
一わたりのはなのみぞ侍りてなむ。うたの次
第は君のまに／＼かきいで玉へかし ちか

ごろ京坂にて類題板行千船集清覽集

紀州にて ・ ・ 集^(マ) その外わがとも近藤芳樹も

今ゑらみ侍るまゝ入選の御望みあらば格別の
御出財なくとも自在なる世ぞかし。芳樹か集
には御うたもすこしはつかはし置たり

かも川集撰者、罪ありて牢死せし故、其時の
御出しの御うた直道なども

○ こたび筆加へてなほせるあり。また誤写もあるべし
さるはよくものして正し給はるべし

○ 御うた今よりが大変なり。こゝにて佳境に入の
さかひわすれ玉ふべからず

難波天満

大隈言道

「入選の御望みあらは格別の御出財なくとも自在なる世ぞかし芳
樹か集には御うたもすこしはつかはし置たり」と、弟子達の歌の応
募の件に關しての発言がみられる。「わがとも近藤芳樹」に頼んで
差し上げましよう、積極的である。『草徑集』の板行の時に多大
な出費を請け負った重治の立場も写し出されている。

「御うた今よりが大変なりこゝにて佳境に入のさかひわすれ玉ふべからず」と最後に師としての歌への心構えの再確認を行っている。そして、『壬戌歌撰』の歌集中の添削・批評箇所は朱書されており、事細かな言道の指導の跡を見る事が出来る。

○文久二年四月二十五日の言道から望東尼宛書簡『さゝのや記』^五
(久保猪之吉「晩年に於ける望東尼と言道の関係」引用書簡)

よしの嵐山などいかゝせさせたまふとそれをのみおもひきこゆる程にならなままでゆかせ給ひしとの御文ことさらにあんしんいたし侍る。の給へるやう世の中さはがしくないことにやとわが身のうへまでにかけておもひ侍へれど、ちからおとふことにし侍らねば、ともかくもならばなれかしとおもひきこゆるになむ。

京坂といへど、すこしもよきこと侍らねど、みくには猶更よきことも侍らじ。こゝにあるや、今すこしよろしからむ。

広足もかへりてものさびなり侍りぬ。かの撰み、おそなはり侍りしかど、よろしくかき入させ給はるべし。みうた少なく、凡歌のおほき御生得にましませば、しひてかずを多くすれば、なか／＼なるべし。何もみまのあたりにきこえ侍らむ。何もきのふのあいだにむせ侍りて

神山のあふひをかけしことくさもかれ／＼なからわすれやはする

おもふことばかりにてよりはひたとかたらひまゐらすることもいできず三十年のむかしよりおもひあはすればたのしきみかけにもなり侍りしものからのこりをしくなむ 家集など選ひて侍らば御あとよりしたひまつり侍らむをとみにはすへなくなむこのほどはよるはひまになしてあまたのうたよみそをのみなくさめとし侍る さはいへ箱のうちの如き家のうちなにごとか侍らえむ かねなしにては大都はなにもいできず 本のかね二、三十金も帰りくるやうにとせはする人侍ればそを得なば板行もいでき侍らむきこえあげたきことかいつくし侍らず下らせ玉ひてこそ

う月二十五日

言道

あなかしこ

望東院 御もとへ

「かねなしにては大都はなにもいできず。本のかね二、三十金も帰りくるやうにとせはする人侍れば、そを得なば板行もいでき侍らむ」と、出版するための費用が工面できないという悲痛な訴えを送った。その他にも福岡の門人のもとへも何通か送ったものと思われ、小林重治にも当然、板行のためのお金の相談が、このような手紙の形で持ちかけられたことが推察される。

文久 三年 癸亥 (1863) 六十六歳

○三月、『草徑集』三巻刊行、九七一首、自筆版下。京・江戸・大坂三都で発兌。

序

おのれわかゝりし時よりよみおけるうたどもを、こたびいたに忽りなむとするに、おのれがつくしには、いとうた人おほく、そのなかにはすぐれたる人もすくなくならぬを、あながちによそにしられむのこゝろなくて、いたになどもする人すくなし。さるを、おのれちかごろ、このなにはにきたりて、こゝの友達歌集などものする序おのれもまたせまほしくなりて、かくみだりがはしくかいつめたれど、もとよりよろしうたあるべうもおぼえねど、世の大人がた、まれにもめとどめ給ふがあらば、一歌にてもとるべきはとり、すつべきはすて給はらむこと今さらいふべきにあらず。をこなる人まねにこそ。

文久三年亥正月廿日自記

大隈言道

○この頃しきりに故郷の弟子達に『草徑集』の売りさばきを頼む。

・言道から筑紫いそ子に宛てた書簡。久保猪之吉「晩年に於ける望東尼と言道との関係」の引用書簡。『さゝのや記』所収。

「かの集も、もとこにつかはして かつ／＼いづれにもでき次第

二部三部とつかはし侍れど、いまだ御連中にも、えさゝけ侍らずなむ。こたび百部もすりいでば、かならずさゝけ奉るべし」
「文久三年八月十日」

・望東尼から長野つち子宛書簡(宮徹男氏蔵)

過ぎにし日は浅からず初寒さ耐え難うなん、いかが渡らせ給ふらむ。さて、草徑集三部参らせ侍る。一部は、小寺の君^五に御達し願ひ参らす。はた。御城内になにとぞ一部は御覧に入れられ、御心にかなひ給はば御求めあるやう、御世話くれ／＼願ひ参らすぞかし。何事も御目のあたりにこそ。

望東

集の代は九日ころに手元に御取り寄せありて賜はれかし

つちこの君

みもとに

望東

●文久三年三月序「大隈言道家集」横濱開港資料館石井文庫

1660

つくしの里なる小林重治ぬし(中略)おのれえらびてかく一卷としたる(中略)いとあはれになむ。このなには江も、をしへ子あまたあれど、さるたぐひならで、いにしへによくならひたるみやびにぞありける。おのれこのころ集をものせし(略)

大隈言道

難波の仮庵にてしるす

文久三年 亥のとし三月

○十一月、望東尼『向稜集』に言道が序を書く。

『向稜集』は「言道大人をわがうたに師とたのみし時」の天保四年頃から始まり、三四年間にわたる向稜での生活に即した歌集。

一八四九首。

月花をめぐるこゝろあるをこゝろある人といひ、これをめぐるこゝろなけなるをたゝ人といふ。野村望東子^三をさなきよりこゝろありて、ことによりものにつれてよみいでられたるうたいくそはといふことなし

おのれわかゝりしよりそのうたどもを今のおいにいたるまで見つるに、なべての人のこゝろおよばぬあはれをいひいてゝ、女のわざとはみえがたし。みやこにのぼりて、堂上のめでにもあひ、京人も、なには人も、うらやましきものにいひとよびけるは、御国にしてむかしより今にさくたくひの人ありしをきかず。よし野、はつせ、あらし山、月のせなどをも見もらさず、御国にしては、平尾なる山かげにおもしろくすみなして、花もみぢなどうゑ、月日をおくれる誰人かはあははむ。

此集そのよまれたるうたどもをかたはしよりみづからしるして世にあるほどのなぐさみにせられたる。おのれをしえ子あまたなれど、またゝぐひあることなし。おのれ、なにはにあるほとゝほくはしかきをこはれたれむは、むかしよりのあらましをかいつけおくものなりとつくにのあらぬ風にうつろはで、かゝるさまにて大皇国風のいや千代にさかえなむことこそねがはしけれ
文久三年亥霜月大隈言道しるす

元治 元年 甲子 (1864) 六十七歳

○言道、このころより中風を患う。

慶応 元年 乙丑 (1865) 六十八歳

○一月五日、言道から渡辺広繁(二三)大人宛書簡(二三)言道はこの頃、佐佐木弘綱の『千船集』に、歌を提出するように、しきりに門人達にすすめていた。後半一部分のみが『近世和歌集』(日本古典文学大系)に翻刻されている。この書簡は、はじめ佐佐木信綱が、後に久松潜一が旧蔵していた経緯がある。歌集への出品料金について「よみうた三十首に南簾一片づゝ相添。うた人の望次

第にて二百にても三百にても其割を以入花相添遣し来居申候。」と明確に書かれ、「早きが得に御座候。」と言道の本音を窺い知る資料である。「わたくし草徑集も広綱方に送り」と、言道の『草徑集』刊行に関連した発言について知ることが出来る。

○ 鯨玉集・加茂川集もはや御撰に相成撰者も相果候にて此節はわたくし友達、い勢石薬師の人佐々木重蔵広綱の選千船集に御座候 門弟の歌 鯨玉^(二四)・加茂川などに大に入居申候へども 又此節千船集に入れ可申候。

わたくし草徑集も広綱方に送り、門弟うちも諸国のうたを遣し申追々石薬師へ届居申候。

御うたもⅡの分を一同に御認め此方に御上せ被下候て其内にて吟味いたし広綱に指送可申候。入花はこゝろざし次第に御座候へども、鯨玉集・加茂川集は、よみうた三十首に南鐮一片づゝ相添。うた人の望次第にて二百にても三百にても其割を以入花相添遣し来居申候。此方の申遣しブリにてあちら自由に入撰いたし候に付、加茂川五郎集にも門弟の歌謡二冊に、わたくし弟子歌百六十八首入居申候。右に付思召次第に入花御添可被遊候。

千集初篇二冊 御なぐさみに指いだし申候。御入掌可被玉下候。卷末にうた人の名・国所しるし御座候。只今三篇居たになりかゝり居申候。早々被遣候は、四篇には必入可申候。日本よせ候故。莫太のうたより候よし。早きが得に御座候。万々後便可申上候 頓首

一月五日

渡辺広繁大人

大隈言道

○三月二十二日、佐佐木弘綱から言道宛書簡。言道から広繁たちの歌を送られた弘綱は次のような謝辞をよせた^(二五)。

漸く此比在宿 千船集四編原稿にかゝり居候処へ 御門人御詠草御遣大慶仕候 無相違四編へ編入可仕候 河吉一向急ぎ不申甚困入候 何分遠方板本困申候 しかし 伊勢にて上木仕候ては 天下に行わたり候儀は難叶 夫故御地にて致させ候儀に御

座候 何ぞ進上仕度候へ共 遠方の儀 有合短冊五葉並拙畫賛一葉を進上 晝は舊冬よりはじめ いと／＼つたなく御一笑可被下候 草徑集御次篇出来候はば御恵贈願い上候 一家の御體にて感吟仕候 とかく古人の跡のみふみ候世の中にかく新しくよみ給ふは及ばざる処と人々感心仕候 猶御門生御詠追々御恵贈願上候 昨年御三人の儀承知仕候 広繁君極御老人のよし何卒御長寿奉祈候 出羽秋田田邊詠草もあまた来り居候 四編上木の上御覽被下度候

右御礼まで 匆々頓首

三月二十二日

弘綱

大隈大人 貴酬

言道の歌集に関して「草徑集御次篇出来候はば御恵贈願い上候」と述べた後「とかく古人の跡のみふみ候世の中にかく新しくよみ給ふは及ばざる処と人々感心仕候」と弘綱は、言道の歌に関する的確に、「新しさ」に関して評価している事が伺える。

◇望東尼、姫島に流される。

慶応 二年 丙寅 (1866) 六十九歳

○言道の在坂がいつまでだったかは、はっきりとわかっていないが、右の書簡より十月までは天満に居た事がわかる。(梅野満雄『大隈言道傳』所収)

(前略) 唐人町田浙江の書なり 当名茂甫は則ち己れが父君言朝なり 田浙江は二川相近翁の書の師 この人書をよくして 亀井道載先生も其の子昭陽先生をはじめとして 子はのこらず 浙江の弟子とす されば弟子のいと多かりけるを己が父君もでしなりける由 此手簡は 七夕の祭に父君も若かりし時 書をいだされたりとみえて その文言見えたり 亀井南冥先生も其の夜 父君の懸物をめでられける由 文言に見え侍る石篤兄とあるは 吉田の家臣立石志津馬のことなり 此人父君の友なりし由 その七夕の懸物を父君より借りしにつかはしたるを

不残使に渡したる由見え侍れば 父君出席あらざりしにつけて
取寄せられしなるへし
何事も昔々になりはてゝまだ残りたる我ぞかなしき

慶応二年丙寅十月

大坂天満にて六九翁

大隈言道(二六)

慶応 三年 丁卯 (1867) 七十歳

○春、福岡に帰ったか。

●『続草径集』 (九大本三千首、天理本千四百首) 『続草径集』
天理本千四百一首は、新資料として 天理大学附属天理図書館蔵
大隈言道『続草径集』翻刻と解題(進藤康子)『文献探求』46〜49
号、2008〜2011年)にて紹介。

◇望東尼没。六二歳。

○『荻葉集』(鶴久二郎蔵) 言道と弟子の小林重治と合作。歌それぞ
れ六一首。

○『松下集』 自筆稿本。七八首。年次不詳。言道晩年。『草径集』
及び、言道晩年の歌と重複するものが数首あるので 晩年の集と思
われる。『近世和歌集』(岩波書店、日本古典文学大系所収・昭和四
一年)に新資料として、久松潜一の翻刻がある。

慶応 四年 戊辰 (1868) 七十一歳 没

○七月二九日、ささのやにて没。
香正寺に葬る。「萍堂言道居士」と自筆で彫った墓石が現存。その
裏には「慶応四年戊辰七月二九日 年七十一 大隈姓」と刻す。

◇九月八日、明治と改元。

明治三二年 (1898) 没後

◇佐々木信綱『草径集』三巻を神田の古本屋で見出す。折しも、信
綱の父弘綱は言道と歌友であった。

大正 六年 (1917)

◇十一月、大隈言道翁五十年祭。冊子『大隈言道翁記念篇』(佐々木
信綱編)を配布。

◇十一月二九日より四日間、大隈言道翁遺墨展覧会。

大正 七年 (1918)

◇十一月、『大隈言道』(佐々木信綱、梅野満雄編) 刊行。

大正 十五年 (1926)

◇『大隈言道とその歌』(佐々木信綱、梅野満雄編) 刊行。

昭和 七年 (1932)

◇五月、ささのやの庭に大隈言道大人旧宅碑(佐々木信綱) 建立。

淡窓先生詩碑、金子堅太郎の大隈言道翁旧蹟の石碑。伊東尾四郎が、
冊子『ささのや記』を配布。

◇十月、新開竹雨『大隈言道さくらの歌』を刊行。

平成 一四年 (2002)

◇一二月、『草径集』校註 穴山健ささのや会 海鳥社

平成 一九年 (2007)

◇二月、和歌文学大系74『布留散東・はちすの露・草径集・志濃
夫廼舎歌集』校註(『草径集』校註・解説 進藤康子)

(つづく)

校註

- 一 大隈言道に『月瀬紀行』がある。
進藤康子「大隈急記念文庫蔵『月瀬紀行』についての一考察―大隈言道『今橋集』との関連において」(『語文研究』2002・6)
 - 進藤康子「幕末期月瀬紀行の世界―騎鶴楼画帖、梅武書画帖とその周辺から」(『江戸文学』28号 2003・6 ぺりかん社)
 - 二 文久二年十一月末から文久二年一月五日までの紀行文。原本所在不明。野史『臺刊』贈正五位望東禅尼傳(昭和二十九年刊)江島茂逸編
 - 三 望東尼の亡夫野村貞貫。
 - 四 西田直養、小倉藩士。歌人。大平門。筱舎と号す。『万葉長歌格』『覆舎漫筆』等著す。一七九三(寛政五)年生まれ一八六五(慶応元)年没。七三歳。
 - 五 言道
 - 六 飯塚の人。大隈言道門下。代々酒造業を営み言道の『草径集』には多大の援助をした。
 - 七 福岡県立図書館蔵(福岡県文化会館)
『壬戌歌撰』は、梅野満雄によつて「小林重治が壬戌歌撰」として大正七年に『大隈言道傳』で指摘されていたが、その内容や原本の所在は明らかにされてはいなかった。昭和四五年に福岡県文化会館(現在の福岡県立図書館)に入った。
 - 八 『類題千船収』佐々木弘綱撰。初編、二篇は万延元年、三編は慶応四年。弘綱が萩原弘道の依頼を受け全国から歌を集めた歌集だが、やはり地元の伊勢の歌人が多かった。言道が門下生に応募を勧めた四編は、維新の動乱の故か結局刊行される機会を得ることなく終わった。
 - 九 昭和七年刊。前述参照。
 - 一〇 小寺三三子。小寺貞雄の室。言道門下。明治二年没。
 - 一一 野村もと。剃髪後望東尼。
 - 一二 出羽の国 米沢の人(『統草径集』九大本)。
 - 一三 国文学研究資料館蔵。また、岩波日本古典文学大系『近世和歌集』には、書簡の後半部分所収。
 - 一四 『類題鯉玉集』、加納諸平撰。文政十一年初編。安政元年七編刊。十四冊。全国からの応募作品を厳選した。諸平の主斎する柿園派の歌風を天下に示し全国的に和歌盛行の風潮を興した。地方歌壇の育成の刺激にもなった。六編のころ、長沢伴雄がこれに対抗して『類題和歌鴨川集』を出した。
 - 一五 梅野満雄『大隈言道傳』
 - 一六 右同。
- 大言道の生涯については、次の文献を参照されたい。
『和歌文学大系74』(明治書院)の『布留散東・はちすの露・草径集・志濃夫 迺舎歌集』の「草径集」解説(進藤康子校註・解説)。